審査の結果の要旨

氏　名　　ファルハディ　マリヤム

論文題目　　Positivity of VOID in Built Form
-Void in Tadao Ando’s Architecutre-
（ヴォイド空間のポジティビティ
-安藤忠雄の建築作品におけるヴォイド-）

本論文は、建築家安藤忠雄の建築作品において特徴的なヴォイド空間に着目し、その形態分析を通じて安藤忠雄作品特有のヴォイド空間の特質を明らかにし、その建築の本質に迫ろうとするものである。見学可能な作品は可能な限り自らの目で観察、記録を行い、その体験を通じて得られたヴォイド空間の多様な側面を、その境界面、視覚的関係性、アクセシビリティなどの観点で整理し、安藤忠雄の建築におけるヴォイド空間を定義づけている。

本論文は、全６章で構成されている。
第１章では、ヴォイド空間の都市空間における有効性、また生理学的な観点での必要性を通じ、この論文の意義を示している。
第２章では、ヴォイド空間の持つ境界や中心性の概念を通じ、ヴォイド空間の定義付けを行っている。
第３章では、安藤忠雄の建築作品におけるヴォイド空間を、具体的な作品事例において明示しながら、そこに潜む多様な空間的特質を抽出している。建築の全体性の中での位置づけ、内部と外部の等価性、形態的特性、アクセシビリティ、視覚的関係性、素材など、極めて詳細な観察が記されている。
第４章では、３章で得られた知見をもとに、安藤忠雄のヴォイド空間を Expandable Void、Concentrative Void、Hybrid Void の三つに類型化し、分析を行っている。
第５章では、さらにヴォイド空間を、移動や視覚的体験といった観点でプロトタイプとして分析を行い、その特質を体験者の視点から明らかにしている。
第６章では、これまでの議論を踏まえ、ヴォイド空間における移動と視覚の制御によってもたらされる周辺環境との関係性に、安藤忠雄のヴォイドの特質があると結論づけている。その体験の豊かさが、ヴォイド空間にポジティビティを見いだす所以であることも述べられている。

安藤忠雄の建築については、これまでどちらかというとコンクリートの表現や、プライマリーな幾何学的形態といった､建築の造形そのものに対する評価や議論が主たるものであった。あるいはまた、自然と建築の共生といった視点で語られることも数多くあったが、その多くは抽象度の高い議論に終始していたと言わざるを得ない。
その中で、安藤忠雄の建築をヴォイド空間という視点から論ずる本研究は、極めてユニークでありまた独創性に溢れており、安藤忠雄の建築の本質を的確に捉えたものであるとも言える。またヴォイド空間そのものを形態的に論ずることも、建築形態論の分野においては新しい試みであり、今後都市空間やランドスケープデザインなどの領域にも展開できる、多くの可能性を秘めている視点であり、高く評価することができる。
よって、本研究の成果の建築界に対する貢献も多大なるものになることが期待でき、
本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格とするものである。